

飛鳥時代の名張と周辺地域

飛鳥時代とは 古墳時代の終焉に都が飛鳥に置かれた崇峻天皇 5 年(592 年)から和銅 3 年(710 年)にかけての 118 年を指す。また、狭義には、聖徳太子が摂政になった推古天皇元年(593 年)から藤原京への遷都が完了した持統天皇 8 年(694 年)にかけての 102 年を指す。

美術史においては

大化の改新(645 年)から 710 年の平城京遷都までを白鳳時代(白鳳文化)としている。

伊賀市中友生の見徳寺・薬師如来坐像は白鳳仏像

名張では取り上げの(古事記に古く出現)推古 7 年に大和地方が大地震(599)

諸国に地震の神を祭る。比奈知の名居神社

大化の改新(645 詔 646)

詔 畿内の四至を決める。 畿内東自二名壑横河一以来 名壑表記

壬申の乱において名張川を渡るときに 隠郡表記

大海人皇子(後の天武天皇)が勝利を占った。壬申の乱(672)に勝利の後名張に宿泊 名張表記

大伯皇女が斎王として伊勢に赴く時に泊瀬齋宮で禊し身を潔めて、ややに神に近づく所なり(天武 2 年 4 月)
(天武 3 年 10 月)大来皇女、泊瀬齋宮より伊勢神宮に向かう

大津皇子が伊勢の姉(斎王)に逢いに名張經由

その後 694 年に夏見廃寺金堂は建立出来た。 持統天皇の伊勢巡幸の時、名張に宿泊(692)

古事記

天武天皇が編纂を命じた。和銅 5 年(712 年)に太安万侶が編纂し、元明天皇に献上された。

中大兄皇子(天智天皇)らによる蘇我入鹿暗殺事件(乙巳の変)蘇我蝦夷は大邸宅に火をかけ自害した。この時に書庫などが炎上し、『天皇記』など数多くの歴史書はこの時に失われた。

壬申の乱後、天武天皇が即位し、『天皇記』等焼失した『国記』に代わる国史の編纂を命じた。

古事記の序文に 過去を回顧 古事記の企画 古事記の成立

古事記の企画 天武天皇(673~686 年)の発案 正しい歴史と系譜を作成し後世に伝えるため企画

諸氏族が持つ帝紀と本辞が、真実と異なり 帝紀や旧辞を集め偽りを削り事実を定めて、後世に伝えたい。
成立

天武天皇はこの稗田阿礼に命じて天皇家の物語と系譜をそらんじ、太安万侶に筆録を命じた。

元明天皇は和銅四年九月十八日に稗田阿礼が暗記している帝紀を撰録して献上せよと臣安万侶に仰せられた。

古事記 三代安寧天皇 その子の 4 代懿徳天皇(いとく) その弟に師木津日子命の子の子孫に

伊賀の須知稻城・那婆理稻城・三野稻城の祖先

須知稻城は矢川付近 那婆理稻城は名張 三野稻城は現在の美旗

稻城は藁で出来た。稲を積んで事態にそなえた砦

日本書紀には垂仁天皇 5 年の条, 雄略天皇 14 年の条, 崇峻天皇即位前の条などにみえる。

また日本書紀の成務 5 年条に「諸国に令(みことのり)して国郡に造長(みやっこおさ)を立て、県邑(あがたむら)に稻置を置く」地方官の一つ。 6 世紀は「稻置」的体制の時代

推古 7 年に大和地方が大地震

諸国に地震の神を祭る。比奈知の名居神社 599年推古天皇7年4月27日（新暦5月28日）

『日本書紀』に、地震が発生し、建物が悉く（ことごとく）倒壊した。四方に命じて地震の神を祀らせた。
『聖徳太子伝略』に、聖徳太子が地震を予測して、建物の補強をうながした。（春3月）

地震の後は、税の免除を建言（けんげん 意見を申し立てる）した。（夏4月） とある。（917）年成立）
鎌倉時代後の多くの太子伝は、主にこの書による。

聖徳太子 厩戸皇子（621年没、622年没説有）

用明天皇の第二皇子 母は欽明天皇の皇女・穴穂部間人皇女 用命天皇即位（585）仏教の受容を巡って
崇仏派の蘇我馬子と排仏派の物部守屋とが激しく対立 厩戸皇子は勝利し、大豪族であった物部氏は没落した。
推古天皇のもと、蘇我馬子と協力して摂政政治 遣隋使の派遣。冠位十二階や十七条憲法を定める。

神道と、仏教や儒教を取り入れ。信仰と興隆に努めた。 推古天皇15年（607年）小野妹子を使者とし隋に国書
を送る。翌年に返礼の使者である裴世清。「皇帝 倭皇に問ふ」と有。

厩戸皇子の返書に「東の天皇 西の皇帝に敬まひて白す」

推古天皇28年（620年）、『国記』、『天皇記』、『臣連伴造国造百八十部并公民等本記』歴史書を編纂した。

厩戸王（本名）聖徳太子（没後に送られた諡号・・・おくりな・・・しごう）

日本書紀 推古天皇29年春二月五日 半夜（よなか）に厩戸豊聡耳皇子命、斑鳩宮に薨り

厩戸豊聡耳皇子命の「皇子命」は「みこのみこと」（現代訳日本書紀では聖徳太子は斑鳩宮に薨去）

この時代に皇太子の制度はなく（7世紀末から）摂政は遙かに後「みこのみこと」は単なる皇子ではなく、特別な地位を表す称号であった。この称号は後の中大兄皇子、草壁皇子、高市皇子など国政を任され有力な皇位継承候補皇子 太子はこの称号で呼ばれた最古の人物。（参考文献：『日本古代史料学』東野治之 岩波書店）2005.3）

聖徳太子の没年

太子の没年『日本書紀』は「推古天皇29年（621）春2月5日夜半に厩戸豊聡耳（うまやどのとよとみみの）
皇子命、斑鳩宮に薨（かむさ）りましぬ」 2021年に没後1400年

「法隆寺釈迦像光背銘」「天寿国繡帳銘」「法起寺塔露盤銘」「上宮聖徳法王帝説」「聖徳太子殿補闕記」など
ほとんどが推古30年（622）としている。2022年に没後1400年

聖徳太子が亡くなったとき、諸王・諸臣・天下の百姓は愛する子供を亡くした時のように、父母を亡くした時のように泣き、泣く声が行路に満ち・・・日も月も光を失い、天地も崩れこれから誰を頼みにしたらよいのか。と表現している。それは単なる政治指導者が亡くなった時、以上の遙かに超えた状態を表現することを、聖者として日本書紀に記している。

法隆寺釈迦三尊像 光背の銘

法隆寺金堂本尊釈迦三尊像の舟形光背の裏面中央に

196文字の銘文。銘文には

造像の年紀（623年）や聖徳太子の没年月日などが見え、法隆寺や太子に関する研究の基礎資料となっている。

法興元年は崇峻4年（591）法興元世一年は推古29年（621）

法興元世一年歳次辛巳十二月、鬼前太后崩。明年正月廿二日、上宮法皇枕病弗愈。干食王后仍以劳疾、並著於床。時王后王子等、及與諸臣、深懷愁毒、共相發願。仰依三寶、當造釋像、尺寸王身。蒙此願力、轉病延壽、安住世間。若是定業、以背世者、往登淨土、早昇妙果。二月廿一日癸酉、王后即世。翌日法皇登遐。癸未年三月中、如願敬造釋迦尊像并侍及莊嚴具竟。乘斯微福、信道知識、現在安隱、出生入死、隨奉三主、紹隆三寶、遂共彼岸、普遍六道、法界含識、得脫苦緣、同趣菩提。使司馬鞍首止利佛師造

「推古天皇 29 年（621）12 月、聖徳太子の生母・穴穂部間人皇女が亡くなる。翌年正月、太子と太子の妃・膳部菩岐々美郎女（膳夫人）がともに病気になる。膳夫人・王子・諸臣は、太子等身の釈迦像の造像を発願し、病氣平癒を願った。しかし、同年 2 月 21 日に膳夫人が、翌 22 日には太子が亡くなり、推古天皇 31 年（623）に釈迦三尊像を仏師の鞍作止利に造らせた。」

法隆寺

『日本書紀』は 606 年（推古天皇 14 年）、寺伝によれば 607 年（推古天皇 15 年）に聖徳太子が建立
別説 推古 15 年は我が国第一号の飛鳥寺が造営中、完成は推古 17 年（609）、第二号の法隆寺は 607 年に「丁卯年興法隆寺」は完成でなく、興し始めると解釈でき発願された年。

法隆寺薬師如来坐像 光背 「用明天皇が病氣の時（用明天皇元年（586 年）、平癒を念じて寺（法隆寺）と薬師像を作ること誓われたが、果たされずに崩じた。のち推古天皇と聖徳太子が遺詔を奉じ、推古天皇 15 年（607 年）に建立した。」

607 年に建造興す（開始）薬師坐像は創建法隆寺では本尊であった。天智 9 年の火災後に再建された金堂は釈迦三尊像が本尊になった。金堂内陣の須弥壇上には中央に釈迦三尊像、東に薬師如来像、西に阿弥陀三尊像を安置する。釈迦三尊像は聖徳太子の等身

法隆寺金堂壁画 夏見廃寺大型多尊塼仏 敦煌莫高窟 新宿瑠璃光院 敦煌 220 窟 阿弥陀浄土図

法隆寺金堂 五重塔⇒今回 塔内の四面塑像

北面・涅槃像土 法隆寺の泣き仏 釈迦の脈をとるジーヴァカ（耆婆、ぎば） 釈迦の風疾を治療

中国（河北省南部） 南響堂山石窟

法隆寺は天智 9 年（670）に火災「衆人、寺地を定むるを得ず」（『太子伝補闕記』）再建は和銅 4 年（711）に完成
五重塔の心柱は 594 年に伐採された。年輪年代法 伐採から 100 年も寝かしていたか

他の塔からの転用か（豊浦寺か飛鳥寺か）飛鳥寺完成は 596 年 ・時期は合うが 593 年に心礎に舍利

年代的に無理 伐採 594 数年寝かす 不可能

・豊浦寺は大化の改新後（645）維持困難 ・伐採後に寝かしていたのが可能性大

法隆寺の 670 年火災からの再建

天武八年四月に詔（679） 「諸の食封（へひと）有る寺の所由（よし）を商量（はか）りて、加（ま）すべきは加し、除（や）むべきは除めよ」とのたまふ。 是の日に、諸寺（てらでら）の名を定む。

（寺名は今まで地名だったが、法隆寺などの漢風の名）

『法隆寺縁起井流記資財帳』に許世（巨勢）徳陀高（とくだこ）が納めた食封三百戸が天武八年に停止された。と記載 和銅四年（711）に五重塔の塑像が造る。ことからこの時までには完成している。

再建は中断やがたびたびあったと思われる。火災 670 年翌年（671）12 月に天智天皇の崩御

翌年 672 年この年 6 月に壬申の乱・・・後で取り上げる。

天武九年四月 勅「おおよそ諸寺は、今後、国の大寺二、三を除いて、その他は官司の管理をやめる。ただし食封を所有しているものは、三十年を限度とする。また思うに飛鳥寺は官治すべきではない。しかし古い大寺として官治が行われたし、かつて功勞のあった歴史があるので、今後も官治する中に入れてよい」

この後再建はどうしたか。

金堂は細々と続けられ、持統七年 693 に仁王会が行われているので、金堂はこの時には完成していた。

日本書紀の持統 8 年 5 月 11 日に諸国に金光明経百部送る『法隆寺縁起井流記資財帳』に持統 8 年（694）甲午年に天皇から金光明経 8 巻が送られたと記載に一致 夏見廃寺塼仏も甲午年 5 月中とあるのと一致

五重塔は和銅4年(711)までに完成

法隆寺金堂壁画は693年には描かれていた。

日本書紀の持統8年5月11日に諸国に金光明經百部送り届けよ毎年必ず一月の七、八日頃に、その經を読誦せよ 塙仏も一具とされたか。作者は百濟王明哲作と読める

僧徳聡等像造記銅板 (左:表、右:裏)(法隆寺蔵)

(『仏教伝来』奈良県立橿原考古学研究所付属博物館2011年より転載、註29)

(表)「甲午年三月十八日鵜大寺徳聡法師 片岡王寺令弁法師 飛鳥寺弁聡法師三僧所生父母報恩敬奉觀世音菩薩像 依此小善根令得无生法忍乃至六道四生俱成正覺」

(裏)「族大原博士百濟在王此土王姓」

百濟王氏(くだらのこにきしうじ)は、百濟最後の王である義慈王の子である善光を始祖とする日本の氏族。持統朝に百濟王の氏姓を賜与された。百濟王善光は『日本書紀』持統7年(693)に没か

7年正月「正廣參を以て百濟王善光に賜ふ。」

百濟王善光の子が前の「甲午年三月十八日鵜大寺徳聡法師 片岡王寺令弁法師 飛鳥寺弁聡法師三僧所生父母報恩敬奉觀世音菩薩像」の3名の僧で、賢い3名のことを明哲と呼ぶ。複数人を呼ぶ名として懷風藻の釈道慈に中国の賢者を探すのに「明哲を歴訪し」とあり、夏見麁寺の塙仏に百濟王明哲作としたことが考えられる。

法隆寺再建は困難

官からの援助が途絶え、いかに再建できたのか。

薬師坐像は創建法隆寺では本尊であった。天智9年の火災後に再建された金堂は釈迦三尊像が本尊になった。金堂内陣の須弥壇上には中央に釈迦三尊像、東に薬師如来像、西に阿弥陀三尊像を安置する。聖徳太子の等身である。釈迦三尊像は再建法隆寺の本尊になった。この時に法隆寺再建は太子発願寺院ではなく、聖徳太子への回帰する寺院へと変貌した。聖徳太子信仰の寺へと変貌は天武朝時代 この時は朝廷の国家官寺の扱いは受けられなく、一般寺院の扱い。法隆寺の僧侶達の太子信仰へと出発させた。

再建法隆寺が制作したのが金堂壁画で、最上各の寺院へ太子信仰の寺へと脱皮した。

名張の聖徳太子 西光寺ホームページより

蔵持 西光寺(今を去る550年前建立)

聖徳太子の子 山背大兄王

推古天皇が病死後 後継問題が発生 蘇我氏の庶流(しよりゅう分家)境部摩理勢(馬子の弟)らは山背大兄王を擁立 蘇我蝦夷の擁立する田村皇子らと皇位を争う 皇位は田村皇子が継承。629年に即位(舒明天皇)

蘇我氏の実権が蝦夷の息子の蘇我入鹿に移ると入鹿はより蘇我氏の意のままの古人大兄皇子の擁立企画中継ぎとして皇極天皇を擁立 山背大兄王と蘇我氏の関係は決定的に悪化 蘇我入鹿は、斑鳩宮の山背大兄王を襲撃 生駒に脱出 山背大兄王は生駒山を下り斑鳩寺に入り、山背大兄王と妃妾など一族はもろともに首をくくって自害。上宮王家絶えるが、片岡女王は一族滅亡後も生きて法隆寺の再建に立ち会う可能性 『上宮聖徳法王帝説』東野治之(岩波書店岩波文庫2013年)

片岡女王は

聖徳太子と蘇我馬子の子の刀自古郎女の子 山背大兄皇子・財王・日置王、次に片岡女王 以上4人の末子

『法隆寺縁起井流記資財帳』、国宝・灌頂板を奉納したのは「片岡御祖命」とあり、片岡女王と同一と考えられ、聖徳太子の子として、法隆寺再建を見届けたと考えられる。

乙巳の変（645）

中大兄皇子・中臣鎌足らが蘇我入鹿を宮中にて暗殺して蘇我氏（蘇我宗家）を滅ぼした政変 蝦夷は館に火を放ち『天皇記』、『国記』、その他の珍宝を焼いて自殺 皇極天皇は軽皇子へ譲位した。孝徳天皇

大化の改新（645）

大宝元年（701年）の大宝律令完成まで豪族中心の政治から天皇中心の政治へと変遷した。これから「日本」と「天皇」の称号の使用が始まった。都を難波長柄豊碕宮に

改新の詔（大化2年（646年）正月）第2条

凡そ畿内は、東は名壑の横河より以来、南は紀伊の兄山より以来、西は赤石の櫛淵より以来、北は近江の狭々波の合坂山より以来を畿内となす。

中大兄皇子が中心の時代 天皇は孝徳天皇

白雉5年（654）孝徳帝の没後、斉明天皇（皇極天皇が重祚）飛鳥板蓋宮に遷宮

白村江の戦い

百済が660年に唐・新羅に滅ぼされたため、朝廷に滞在していた百済王子・扶余豊璋を送り返し、百済復興を図って白村江の戦い663年8月28日（天智天皇2年7月20日）に白村江の戦いで大敗。

白村江戦以後 国土防衛の政策の一環として水城や烽火・防人を設置した。

667年 - 3月、近江大津宮へ遷都 天智天皇 皇太子 大海人皇子

668年 - 1月、即位。2月、大海人皇子を皇太弟とする。

天智9（670）には、日本最古の全国的な戸籍「庚午年籍」を作成し、公地公民制が導入。法隆寺が火災焼失 子・大友皇子を史上初の太政大臣に任ず 671年 - 10月、大海人皇子が吉野へ去る。12月3日天智天皇崩御 大友皇子

天智天皇の子。大化4年（648）に生まれ、伊賀皇子と呼ばれた。671年わが国最初の太政大臣 大友皇子は明治に入った明治3年（1870年）に諡号を贈られて弘文天皇と呼ばれた。『日本書紀』には皇太子とも、即位したとも記していない。『懐風藻』は、大友皇子を「皇太子」と記す、天皇と記せず。 現在は即位せずの意見が多い。母は伊賀妥女宅子娘（いがのうねめやかこのいらつめ）で伊賀国山田郡の郡司の娘と言われている。

現在の大山田村鳳凰寺の出身であると言われている。【鳴塚古墳】 三重県伊賀市鳳凰寺の墓の可能性

壬申の乱で大海人皇子に敗れ、山前（やまさき）で自害 大津市役所の裏には宮内庁管理の弘文天皇陵

壬申の乱 672年

天智天皇10年10月17日（671年11月23日）、大友皇子を太政大臣につけ後継とするとその後、天智天皇は病に臥せる。大海人皇子は大友皇子を皇太子として推挙し、自ら出家を申し出て、吉野宮（現在の奈良県吉野町）に下った。天智の娘の菟野沙羅良を正妃と一緒に19日吉野宮入る。12月3日（672年1月7日）、山科で天智天皇が46歳で崩御

672年5月に朴井連雄君（えのいのむらじおきみ）美濃・尾張から吉野に帰着し報告。天智天皇の山陵を造る人夫に武器を与えていたのを知った大海人皇子は、近江朝は私を亡き者にしようと謀っている。美濃の兵を集めよ。国司らに触れ軍勢を発し、速やかに不破道をふさげ。われ出発する。天武天皇元年6月24日（7月24日）に吉野を出立した。東に入らむとす。（伊賀以東）

壬申の乱の始まり

6月24日出発（現代7月24日）は、妃は輿に、他は徒歩、途中皇子は馬乗る。始より従う者 草壁皇子、忍壁皇子、舎人の朴井連雄君（えのいのむらじおきみ）20名余人 女子10余人 菟田の吾城（あき）経由。菟田郡家の頭に会う。伊勢国の馬50匹とあう。全員乗馬獵師20人余り追加。大野で日落（ひく）れぬ。

国立天文台で19時05分 山暗く進行困難、家の籬（かき）をこわして燭とした。

夜半に隠郡につき、駅家（うまや）を焼いた。邑のなかに呼びかける。「天皇（すめらみこと）東の国に入る 従う者は集まれ」誰1人出なかった。

隠郡という文字で名張を表す。この段階で大海人皇子は天皇と扱われた。誰も出てこなかったということは、賛同していなかったか？名張郡司は出兵を拒否したのか

隠郡の駅家

「名張市史」では、宇多川の兵頭瀬を渡り、右岸を矢川→丈六→相楽→横川のルートを示し、横川を渡るのは夏見坊垣あたり。このルート上に駅家があった。候補地は観音寺遺跡、黒石遺跡のある箕輪中村や、黒田、結馬もある。

大化の改新の詔

第2条 初めて京師を定め、畿内・国司・郡司・関塞・斥候・防人・駅馬・伝馬の制度を設置し、駅鈴・契を作成し、国郡の境界を設定することとする。

「鈴鹿（伊勢）・不破（美濃）・愛発（越前）」に「関塞（せきそこ）」を置くことあり、四至も関塞の可能性があり、四至の横川界隈にも関塞であったと思われる。関塞は軍事防衛上の境界点であった。

一説に酒屋門は境門と通じる関塞とするのも（黒田）

横河に着こうとする頃、黒雲が現れ、天皇は怪しみ、燭をともし自ら式（ちく）をとり（陰陽道の道具）占う。

「天下が二分されるしるしだ。最後に朕天下をとる」とのたまう。

式（ちく）をとり（陰陽道の道具）占う。

横川を超えるということは、畿内から出るということ ローマ内戦でカエサルがルビコン川を渡るという 賽は投げられた。後へは引けない。

急ぎ伊賀郡に至りて伊賀駅家を焼く。伊賀の山中でその国の郡司ら数百の兵が従う。

明方に荊荻野（たらの）休息食事。積殖（つむえ）の山口で高市皇子と合流す。

占い（式占 ちよくせん）

「式占」とは、要するに「式盤」と言われる板のようなものを用いて行う占いの総称

怪異（カイイ）の正体を探るのにも用いられた。

陰陽師達が活躍していた時代に「式神による呪詛」のリアルタイムの記録がある。藤原実資（957-1046）の日記の目録、「小記目録」など。

日本書紀の壬申の乱 岩波書店 日本古典文学大系 27ページもある。

勝利後

8月27日 武勲を立てた人々に勅して、功をほめ恩賞を賜った。

9月8日 天皇は帰路につかれ、・桑名・鈴鹿・阿閉・

11日 名張に宿られた。 12日 飛鳥にお着きになる。

功勞表彰と恩賞 伊賀国の紀臣阿閉麻呂 名張には恩賞は書かれていない。

天武2年4月 大来皇女 伊勢の斎王として泊瀬齋宮に住まう 身を清め次第に神に近づくため

3年10月9日 伊勢神宮に移る

4年1月5日 占星台をたつ 天文観察し吉凶を占う 天武天皇は天文の術に長じていた。(横川の占)

5年夏6月 大きな旱 四至(よも)の諸の神に祈る

7月~9月 大彗星 8月四至の大解除 大赦 8月放生 11月放生 四至に使者 金光明経・仁王経

この年に新城(にいき)に都を造ろう:藤原京の立案か

8年(679)4月5日 諸寺の名を定む。是まで地名を称していたのを法名漢風にした。

8年5月5日 吉野の盟約

天皇・皇后・草壁皇子尊・大津皇子・高市皇子・河嶋皇子・忍壁皇子・芝基皇子 千歳まで無事だと誓う
よき人のよしとよく見てよしと言ひし吉野よく見よよき人よく見つ 万葉217(持統は吉野に31回行幸)

13年(684)10月14日白鳳地震 南海トラフ 土佐国に大きな津波の記録

14年(685)3月27日 「諸国に家毎に仏舎を作り仏像と経を置いて礼拝供養せよ」

・・・これから9年 夏見廃寺金堂が完成(694)

夏見廃寺埴仏の須弥壇甲午年5月中から694年 夏見廃寺のは欠け二光寺廃寺とあわせ確認

天武14年9月15日 歌男、歌姫、笛吹く者を子孫に伝えよ、歌笛を習え

9月18日 天皇、大安殿にて、王(おおきみ)卿(まえつきみ)を集め博戯(はくぎ)する。

博戯は賭をともなう勝負事で、持統3年に12月に禁止、文武2年に禁止とあり、双六等のこと。

正倉院に伝わる紫檀金銀画の筒や象牙のサイ

翌年の朱鳥元年5月24日・・・天皇発病

6月22日 名張厨司火事

厨司は天皇の食膳に供する鳥・魚・貝類等を捕らえるための施設で名張の場合は鮎・雑魚

「あゆ」を捕る築(やな)が設けられた 火災は意味深い

天武天皇発病の対応

5月24日。天皇は初めて、病気で発熱しました。それで川原寺で薬師経を説かせる。

左右の大舎人を派遣、諸々寺の堂等を掃き清る。天下を大赦した。囚獄(ヒトヤ=牢獄)は空

34人に爵位授与。功績者を28人選び爵位を増加 6月10日。病気占う、草薙剣が祟っている。

尾張国の熱田社に送った。百官を川原寺に派遣、燃燈供養。齋(オガミ)悔過 100人の僧に金光明経読ます。

「天下のこと皇后と皇太子に申せ」大赦 僧尼100人出家。100菩薩像、観世音経200巻。

686年9月9日(10月1日)天武天皇病が癒えず崩御

檜隈大内陵 天武持統合葬陵 野口王墓 八角墳 内部が解る数少ない陵墓

686年9月9日(10月1日)天武天皇病が癒えず崩御

第41代天皇・持統天皇(鸕野讃良皇女)

10月2日 大津皇子 謀反

3日訳語田で自害 山辺妃皇は髪を振乱し裸足で殉死

後漢書に伏皇后記に「后、被髪徒跣、行泣過」

併せて逮捕:矢口朝臣音櫃・ゆき連博徳・中臣朝臣臣麻呂・巨勢朝臣多八須・新羅沙門行心・舎人と杵道作等三十余人

姉の大来皇女に会うために伊勢神宮に下向した時に大来皇女が作った歌

万葉集 105、106

わが背子を大和に遣るとさ夜深けて 暁（あかとき）露にわが立ち濡れし
二人行けど行き過ぎ難き秋山を いかにか君が独り越ゆらむ

万葉集巻第2 163～164 番

（処刑後、大来皇女が退下・帰京途上で作った歌）

神風の伊勢の国にもあらましをなにしか来けむ君もあらなくに
見まく欲（ほ）りわがする君もあらなくになにしか来けむ馬疲るるに

大津皇子 辞世の句

ももづたふ磐余（いわれ）の池に鳴く鴨を今日のみ見てや雲隠りなむ

訳語田幸玉宮跡伝承地 大津皇子の自宅 自害地

持統2年 11月 天武天皇を大内陵に葬る この日まで殯宮で長期の儀式 皇太子が慟哭

大津皇子の屍（かばね）を葛城の二上山に移し葬（はぶ）る時に、大伯皇女の哀しび傷（いた）む御作歌二首。

万葉集 165 うつそみの人にあるわれや明日よりは二上山を弟背（いろせ）とわが見む

万葉集 166 磯の上に生ふる馬酔木を手折らめど見すべき君が在りと言はなくに

二上山に移し葬（はぶ）る時とはどのような時か 166は移し葬るには似ず。伊勢から帰る時か。

やはり移葬の時と思うしかも春か（馬酔木）

二上山 山頂近く 『大和名所図会』寛政3年（1791）刊行に「二上山墓 大津皇子の墓」と、江戸時代中期に突如現われる。現在、古墳ではないという結論

鳥谷口古墳

1983年、土地整備の工事中に発見された。1辺約7.6mの方墳、横口式の石室。内部出土品は無く、周囲で出土の土器は7世紀後半の古墳と断定石室は狭く、大人の棺は入りきらない。納骨だけの奇妙な墓。石室の各石は、家型石棺の蓋の未完成品を転用と寄せ集めの異様なもの。だが格がある凝灰岩を使用

周辺には他に古墳はない。孤立した古墳。まさに急遽造った大津皇子伝説にふさわしい墓

草壁皇子の死 万葉集は日並皇子（ひなみしのみこ）

持統天皇3年（689年）4月13日薨御（27歳）立太子となっていたと思われる。

（その子が後の文武天皇・・25歳で死ぬ707年）

草壁皇子は壬申の乱で最初から父天武天皇に従って吉野より出発していた。

持統天皇は夫に先立たれ、最愛の息子が死にいたたまれなくなった。大津の祟りと思ったか？

鳥谷口古墳は急遽造られたような古墳・再葬か？

ところが 日本書紀に 中臣朝臣臣麻呂・巨勢朝臣多八須 2月26日に9人判事（大津謀反時の2人有）

3月24日に大赦 この時草壁は病と思われる 急遽大津の屍を移葬したと思われる。二上山に

二上山は聖なる山

「中臣寿詞」：（天皇の即位式および大嘗祭において、中臣氏によって奏上された祝いの祝詞）天皇が飲む水は「天の水」で天上の靈威の籠もる神聖な水「天の二上」の水を日々口にすることで靈的な力が得られ、活力が維持される再生の為の「ヲチ水（変若水）」で二上山はその水に深くかかわる。

「中臣寿詞」には「天の二上」の天つ水を立奉る。その下より天の八井出（やいい）でむ。その湧き出た水をも

って「天つ水」を食せ。とうたわれる。その聖なる二上山に葬ることにより、草壁皇子の病が癒えると考えて、移葬したと思われる。9人の判事の内先ほどの2名は関わったと思う。

689年2月26日(判事)～4月13日の間に移葬と考える。大来皇女は686年11月16日に伊勢から京に還る
3年(689)4月13日草壁皇子の死

3年5月 新羅の弔使者(とむらいししゃ)対応が悪く献上物は封印して持ち帰らす。

6月24日筑紫で新羅の弔い使者の金道那(キンドウナ)を もてなす宴会を設けました。

7月15日詔(ミコトノリ)射(イクサ)を習う場所を築かせた。

7月20日偽兵衛河内国(カスイノトネリカフチノクニ)の人の柏原広山(カシワハラノヒロヤマ)を土佐国に流しました。 偽兵衛は宮を守る門番などの護衛の偽物 天皇暗殺未遂とか、クーデター未遂があったか

8月16日摂津国の武庫海、紀伊国の有田川下流、伊賀郡の身野(ムノ)三野稻城(美濃波多村)

漁獵(スナドリカリ)を禁じ、守護人(モリビト)を置く禁漁区

3年8月 戸籍を造る 強者武事を習わす「射(イクサ)」を練習場所を作らせた、その状況を見に行ったよう。

持統6年2月11日の詔 伊勢行幸

「3月3日に伊勢に行こうと思う」

中納言の三輪朝臣高市麻呂(ミワノアソミタケチマロ)は表(フミ)を奉り、直に言い、天皇が伊勢に行くことを、農時(ナリワイノトキ)を妨げると諫めました。

3月3日伊勢へ行幸する。大三輪高市麻呂は冠を脱いで諭す…地位を捨てて持統天皇を止めたがダメだった。

伊賀・伊勢・志摩の国造ら冠位を与え、合わせて 今年の調役(エツキ)を免除

名張にも通過宿泊か 20日に宮に帰る。

柿本人麻呂と万葉集

天武天皇9年(680年)には活躍が始まっていた。持統天皇の時代が即位からその崩御まで活躍

天皇の賛歌「大君は 神にしませば」「神ながら 神さびせすと」「高照らす 日の皇子」のような天皇即神の表現などを高らかに賛美した歌を中心に活躍

代表作

東の野に炎の立つ見えてかへり見すれば月傾きぬ

柿本人麻呂が軽皇子を称えて詠んだ歌

軽皇子を東の太陽、亡くなった父・草壁皇子を沈みゆく月に見立てて、継ぐ皇子は立派にこの世を治めていかれます。父草壁皇子は立派でしたよと大宇陀の阿騎野

持統8年(694)

5月11日 金光明経1百部をもって諸国に送る。必ず年毎の正月の上玄に読め 正月8日～14日に転読

・・・夏見廃寺の塙仏記述日 甲午年五月中 夏見廃寺金堂はこの年には完成 11月 大赦

12月6日 藤原宮に遷都 万葉集28 春過ぎて夏来るらし白妙の衣乾したり天の香具山

文武天皇に譲位 持統11年8月1日(697)

薬師寺の完成

天武天皇9年(680年)に皇后(持統)の病氣平癒を祈願して造営を始めた大和国の薬師寺を完成させ、勅願寺とした。この時から作り始め 文武天皇2年(698年)には寺の造営がほぼ完成

持統11年6月26日 天皇病の為仏像を造る 7月29日 仏像開眼 薬師寺完成

薬師寺縁起

大田皇女 天智天皇の長女 一男二女を生みたまふ。

大来皇女 最初は齋宮なり。神亀二年(725)を以て清御原天皇の奉為に昌福寺を建立したまふ。伊賀国名張郡に在り。

大津皇子 持統天皇四年庚寅正月、大津親王等を禁じ、即ち殺害せらるるなり云々。

今案ずるに、伝へて言ふ。大津皇子世を厭ひ、不多神山に籠居したまふ。而るに謀告に依って掃守司蔵に禁ぜらるること七日なり。皇子忽ちに悪龍と成り、雲に騰り毒を吐き、天下を静かならず。朝廷これを憂えたまふ。義淵僧正は皇子平生の師なり。仍て修円に勅して、悪霊を咒せしめたまふ。而るに念氣未だ平けず。即ち修円を仰いで、一字千金と呼ぶ。悪霊承諾う。仍て皇子の為に寺を建て、名づけて龍峯寺と曰ふ。葛下の郡に在り。掃守寺(かもりでら)是なり。

この頃の夏見廃寺金堂以外の名張では

鴻之巢遺跡

夏見廃寺金堂が694年完成にむけて建築中であり、平行に古墳時代からの竪穴式住居を持っていたが、住居群は廃絶し、あらたな住居群がつくられ、鴻之巢遺跡(現名張市役所)において。竪穴住居と高床倉庫が作られる。

発掘で確認されたのは、竪穴住居41棟、高床建物7棟が見つかり、廂つき建物や、カマドのある建物があり、カマドは21棟が確認されている。

また土馬や、ヤリガンナなどが出土し、大型建物と副屋も確認されている。大きな住居に発展することが確認され、銅製帯金具の鉞尾(ダビ)が見つまっている。寸法規格が少初位に相当する。

奈良時代(平城宮期)天平3年(731)伊賀国正税帳断簡に記載の「主帳下少初位上勳十二等夏見金村」を含む夏見氏居宅と推定される。また、円面硯も出土していて、規則的配置の大型建物群は官衙の様相を示している。

国号 「日本」

大宝令702年(大宝2)の遣唐使が唐で披露

皇帝武則天の承認 『史記』の注釈書『史記正義』(736年成立)には、「武后、倭国を改めて日本国と為す」とある。

『続日本紀』粟田真人が彼の地に到着し、唐人に「日本国の使いなり」と告げる。